

〈研究ノート〉

長崎の記憶遺産の研究—林京子の文学を読む視座に

姜 東 星

一つの都市の歴史の記憶が重要な観光資源である。「固有性や独自性を有し、場の代替性がきかない」¹観光資源は有形と無形のものがある。歴史の記憶が場所と結びついている。

八月九日原爆忌がある長崎という場所は独自のアイデンティティがある。原爆を経験している「長崎」という象徴性は永久に消えないものだろうと思う。しかし、時間がたてば記憶の痕跡が薄らいでいく。忘却の歴史と沈黙の歴史がある中で、歴史の記憶についてどのように語るのか、どのように承継されているのか、場所が持っている象徴性を文学のテーマとして捉えることができる。

長崎の歴史の記憶の発掘の着眼点は後世に読み継がれている文学だと考えられる。作家林京子は長崎で原爆を生き延びた一人である。日中戦争中の中国上海で幼女期、少女期の十四年間を過ごし、一九四五年三月長崎市に引き揚げ、八月九日、学徒動員先の工場で被爆した。林京子が自らの被爆体験を綴った小説『祭りの場』（一九七五年、芥川賞受賞）が書かれてから四十三年経った現在、新たな意味を問いかけてくる。原爆を受けている人の体験は林京子の文学作品の中で永久に継承されている。林京子の文学を参照し、長崎の歴史的記憶を掘り起こすことが可能となる。この〈深層の掘り起こし〉ⁱⁱ（水田宗子『モダニズムと〈戦後女性詩〉の展開』二〇一一年）という「祭り」の原型は林京子文学の記憶の源である。記憶による言葉によって、より生々しく原爆の歴史が保たれているのである。

林京子の文学を読み直すことの意味は大きいと思う。歴史の真相を呈示するだけでなく、現在の問題がより明らかに立ち現れる。文学の中で歴史であることのあかしを求めるのである。同時に、文学自身に関心を持ってもらう。文学の発展を促進し、観光は平和学習の場として再発見していく。「文学と観光」における記憶の遺産はどう承継するのか、どう表現するのか、人間普遍的なテーマである記憶の旅に光を与え、文化遺産の保存、発展を促進することが望まれる。「観光は平和へのパスポート」ⁱⁱⁱという発信力を高めていく力があり、歴史とともに守り伝えられる文学は、生き方を見出す心の拠り所なのである。

本稿は林京子文学を糸口として、「語りえぬものの実存」の表象をモチーフとした、林文学における原型の一つである「祭り」の象徴の意味を考える。

『祭りの場』（『群像』一九七五年）——「語りえぬものの実存」の表象

作家林京子（一九三〇年～二〇一七年）は二〇世紀後半の日本文学を代表する作家であるが、単なる作家ではなく、女性であり、原爆の被害者であり、中国上海から引き揚げた作家である。林京子は『祭りの場』を書くまで三〇年以上の長い時間がかかったのである。この「沈黙」が林京子の表現者としての原点である。その意味では、彼女は日本の戦後文学を本質的に切り開いた女性作家の一人だと思う。

世界は現在でも核兵器の危険にさらされ、放射能の影に怯えている。身体も、心も放射能に汚染された人々の苦悩は続いている。広島、長崎での被爆者が高齢化し、あるいは死亡したことによって、原爆の目撃証言者が年々少なくなっている。原爆を書き残した人は少ない。「原爆が語れない、こうした現実の中で、原爆をどう記憶し、どう語るのか。被爆体験の風化や核兵器開発など現状への危機感から、次の世代に〈原爆の記憶〉を継承する方法を考えなければならない」^{iv} 中で、『祭りの場』は重要な文学作品である。歴史の中でいったい何が起こるのか、抗議、怒り、巻き込まれる悲惨さがあると同時に、人類の文明的な課題をはらんでいるものと考え。どのように原爆を語るのか、書くのか、考えなければならない課題の中で、林文学を取り上げる。

林文学は、「語りえぬもの」の沈黙の裏に隠し持っている真実が儀式的なものの「祭り」によって可視化され、見えるものになり得るのである。

主人公の「私」は県立N高女の生徒で、当日は爆心地から一・四キロ離れた三菱兵器大橋工場に学徒動員で行っていた。『祭りの場』では、「私」の記憶にある長崎での八月九日という一日の、逃げた道を追うことでその日が再現されている。八月九日に学徒動員した三菱兵器工場から出陣した学徒たちの死の衝撃を表出している。

出陣する学徒を輪の中央に立てる。仲間の学徒がこれを囲む。送る学徒は肩を組み輪で囲む。輪のリーダーがヨーオツと声をかける。輪は右にゆらぎ全員左足をあげる。くの字にあげる。踊りは出陣学徒を戦場に送る送別の踊りである。（中略）こんどは歌を唄う。出陣学徒の校歌を全員で唄う。唄いながら踊る。徐々にテンポを早め最後は狂ったように回り、踊りは止まる。

ありがとう—出陣学徒が敬礼する。また逢おう—送る学徒が礼を返す。

最後にみた送別の踊りの輪は送る者送られる者、みんな死んだ。コンクリートの殺伐な工場広場は彼等の祭りの場になっていた。（『祭りの場』三〇頁）

『祭りの場』は、「時間の死に絶えた場」に「祭り」という悲劇的アイロニーに満ちた原型を用いている。「祭りの場になっていた」工場広場は、学徒たちが出陣していく日の送別の場ともなったが、出兵、出陣をする学徒たちが死の世界に送り出されることを暴く。このアイロニーをおびた「祭り」は人間壊滅の祭儀である。「兵器工場の居形の広場で、一步一步ため

らいながら踏みおろす、鈍重な出陣の輪に加わった」学徒たちは、戦時動員令によって戦場に送り出される。少年少女たちの生命を終わらせる死の悲劇はさらに衝撃的である。

林京子の代表作の『祭りの場』は、六日と九日の一瞬に消されてしまった数え切れない命を死者の祭りに託して再現した鎮魂歌である。「祭り」の原型は、「一四、一五歳の少女たちが、父親にも母親にも誰にも看取られず死んでいったからである。何らかの方法でその死を残したい、このまま忘れてしまいたくはない」という立場を表出する。痛みの痕跡は身体の記憶を持っている。林京子は、死の恐怖と遭う祭りの層を繰り返して表出している。顕在的テキストにおける「祭り」は、原爆で亡くなった人への慰霊の祭りである。隠れたテキストは語りたがらない原爆体験、「足もとに累々と転がる死体や重傷者につまずいている」、祭りの裏の意味である。「祭り」は沈黙のモチーフの表象を示していると考える。

また、祭りは一つの「普遍的無意識」であり、記憶の表象である。忘却された記憶、思い出したくない、忘れた記憶を思い出す過程である。C. G. ユング『人間と象徴』^vの心理学の概念「普遍的無意識」は「人類が共通に心理的遺産としてもち、伝えてきた〈心〉の一部」であると指摘している。ユングは「普遍的意識」を〈原型〉とか〈原始心象〉と呼んでいる。「深い無意識の領域に、個人を越えた、集団や民族、人類の心に普遍的に存在する」人間の深層そのものである。「祭り」のイメージと象徴は「普遍的無意識」に深く隠れる原型である。『祭りの場』における祭りの原型の描出は、特に意義が深い。一人の体験ではなくて、原爆の存在自体の覆い隠しとさらけ出しであり、一連の歴史に隠れていること、戦争に対する思考形態が祭りによって介入され、掘り起こすことでその深層が表れたのである。

林京子にとって八月九日は「忘れないための日でもあるが、忘れてしまいたいための日でもある」（『無明』）ダブル・バインドを繰り返している。「瞬間の記憶」というエッセイ集には、「先生の手ひらに顔をあずけて死んだ教え子を焼く校長も田中先生も、今見てきた哀しさを忘れてしまっしてほしい」と、忘れたいもの、忘れたい記憶が書かれてある。それは、李静和（イジョンファ）「忘却は蘇えるか 金石範による応答」^{vi}という論考の、「意識的な忘却が無意識層を作り、外からの抑圧が忘却—無意識の層を重ねる」こととつながる。

広場で出陣の踊りを踊っていた学徒たちは即死、火傷の重傷者は一、二時間にきた。爆圧でコンクリートに叩きつけられて腸が出た学徒がいた。若者だけにうめき声がすさまじかった。

前を歩いている少女を見ると、作業着の背中が狐火のように燃え広がっている。…少女の顔は赤く焦げていた。

どうして同じ人間にうじ虫がたかるのだろうか。「人間の尊厳」を傷つける事実が目の前で起きる。

この語りえぬものの中心にあるのは、人間の原初的な感情である「怒り」、「人間を地獄界の精神状態」に追いやられる怒りである。林にとっては語りたくない話あるいは「遮断する」部分は、むしろ忘れられない記憶としてある。林京子は、「語ろうとしない、表現しようとしていない」^{viii}（水田宗子『大庭みな子 記憶の文学』二〇一三年）忘れえぬ原爆体験、胸の打たれる悲劇を『祭りの場』に封じ込めた。一九三三年に魯迅が書いた文章「忘却のための記念」の表題が示すように、忘れてしまいたい悲憤は、ずっと心に銘記するとともに、忘れられた人を記念するために、いつまでもその人の記憶を持ち続けるのである。

林京子が『祭りの場』を書いた一つの直接の動機は、アメリカが作成した六日と九日の原爆の記録映画の締めくくりの言葉、「一かくて破壊は終わりました一」による。「いったい、何の破壊が終わったというのか、終わったのは建造物の破壊で、私たち被爆者の肉体は、六日と九日を機に、破壊は始まっている」のだから、『祭りの場』は「一かくて破壊は終わりました一」に対するアイロニーの原型であり、反語的な怒りの表明となる。「一かくて破壊は終わりました一」といううわべ（歪曲と覆い隠し）と、身体の破壊が始まっているというさらけ出し（真実と存在）との間の闘争を表現している。

林京子の作家形成において重要な作品である『祭りの場』は、林が自分の命の問題だけでなく、子どもたちの命の問題に目を向けざるを得ない状況の中で、「動かない自分に焦燥を感じていた」意識が執筆の根底にあったと同時に、この世界に多く覆い隠された真相があることを意識しはじめている。原爆被害者は、「原爆症」という三文字のレッテルをはられ、身体にしるしづけられ、差別とさまざまな偏見を受け、生きた人たちである。原爆症の烙印を押された傷は生々しく、血そのままのトラウマを背負って生きている。「原爆症はいつ再発するか知れない苦しみが続く、縁談を断たれ、被爆者と知られれば差別されるがゆえに隠してしまう」という。その中には、生きることへの恐怖というものも内包している。どのように胎児に影響を与えるのか、子どもたちは将来どうやって生きるのか、身体に見えないもの、目に見えない恐怖、そういう問題につながる。原爆被害者の女性の体験というものは、なおさら、そこで沈黙させられたり、隠されたりしてしまう。「小学校の息子を育てている最中、鼻血をすぐ原爆症に結びつける」、命の先に被爆者につながる原爆症や死の恐れもある育児。「胎児の健康の基礎になる、我が身に不安がある。被爆後、私たちの健康状態には、さまざまな異状が出た。生理への影響は特にひどく、直接、産む不安につながった。障害児が生まれる不安から、中絶した友人たちが、いかに多いことか。生命を愛しみながら、障害児への不安は、生命を絶つ、反対の行動をとらせてしまう」（林『カーキ色から藍色の世代へ』）。死の恐怖を内向してしまうと同時に、原爆体験を語れなくなる女性存在となっている。語られることのない女性の成長体験の苦痛に満ちている。それが深層にため込んでいるトラウマの原点である。

『祭りの場』は、個人の忘却することのできない心や身体の体験を抉り出している。身体的な痛みを負い続けてきた人々は恐怖に追い込まれ、隠して結婚しても身体にも心にも傷が残

る。被爆者の生存権利を剥奪する身体は、彼女が世界の真相に接触する媒介になる。

「私」の記憶にある逃げた道を追うことで八月九日が現れ、祭りは「メタフォアとしての記憶—を語っている」記憶への架け橋である。歴史を前に押し戻しつつあり、原爆の不可視なものについて考えていくことになる。『祭りの場』は、語りえぬものの実存として、内面化されてきたものを、「祭り」という隠喩の象徴によって小説の核心としている。林文学の語りなおしをする基礎になっている。また女性の視点による歴史的な再考をも促しているのである。

「祭り」は被爆してなくなった人の世界と生還してきた人の世界に介在する中間地帯である。学徒動員中の友人たちを失った苦痛は、この人たちに対する記憶をもっと鮮明にさせる。小説の主題内容の表層構造は、林自身の「心のかよう青春の哀悼の『祭りの場』」の象徴的な意味合いを持っている鎮魂の場であり、潜在的なものとして、強い原爆体験の痕跡を残した記憶とつながり、この忘れえぬ原爆体験は、『祭りの場』への道筋を辿っている。

林京子の『祭りの場』執筆のもう一つの動機は、昭和三九年十月十日に開会されたオリンピック東京大会、市川昆監督のオリンピックの記録映画である。

輝く秋の場と若さと、健康な白い肌と黒い肌、黄色い肌。お互いに競いあう姿は闘争的だが、平和である。オリンピック閉会式の若者たちは、親しくなった異国の選手たちと肩を組み合せて、グラウンド一面に散って踊り、背をそらして笑い、つないだ手を大きく振って、カメラの前を通りすぎていく。さようなら、また会いましょう。平和な現代の青春を謳歌する青年たちの祭典にダブって、あと一つの祭りの場が、私の脳裏に浮かんでいた。兵器工場の灰色のコンクリート広場から戦場に征った、学徒たちの姿である。学生服に、カーキ色のゲートルを巻いた学徒たちが、肩を組み合せて踊る、踊りの輪である。送るものと送られるものの、生きてあうことがないかもしれない、祭りの場である。『祭りの場』は、オリンピックの陽からあぶりだされた、陰の世界である。この二つが重なる八月九日の『祭りの場』を書いた。

「祭り」が無意識的に生と死とを一体化するからである。健康な青年たちの踊りとやがて死体になってしまう人との重なり合いが、旺盛な生命力を満たす「祭りの場」と、生命の根で痛む「祭りの場」が鮮烈によみがえってくる。「祭り」という原型は、アルフレッド・シモンが『記号と夢想』（岩瀬孝監修、佐藤実枝他訳、法政大学出版局、一九九〇年）の中で言及した「祭儀」にも結びつく。シモンが指摘した「祝祭」の核心問題は、「祝祭は生命の豊かさを確認する。祝祭は暴力に直面する」^{viii} のである。

「被爆者たちにとって、九日の—一時二分の一瞬は、いったいなんだろう」という問いかけは、言葉で表現できない原子爆弾が炸裂した一瞬の痕跡でしか確かめることができない。「祭り」は、消えてゆく瞬間のメタフォアであり、「すべてなくなっている、すべて残っている」残骸の象徴でもある。『祭りの場』は八月六日九日の一瞬の事実を「祭り」という歴史的な原型として記す。歴史的瞬間が永遠に作品に刻印されたのである。歴史的瞬間の時間を導入す

ると同時に最も困難な主題を扱っている。「祭り」は、歴史的瞬間を経験させ、存在的時間を復元するうえで、時間的次元の八月九日に引き戻してしまう。時間の再生になるのは人間の再生であり、「生きられた歴史的瞬間の荘厳化」^{ix}である。『祭りの場』は、作者と一緒に慰霊を行う場所を提供してくれたり、他者の心に、作者自身の内面の心象のイメージを呼び起こす。ここで、「祭り」の「場」は、ユングが示唆しているように、「祭壇でさえ—死を永遠の生命へと変容せしめる場所—を示している。」^x

アルフレッド・シモンが「祝祭のイデオロギー」で、レヴィ＝ストロースはサルトルとの論争の中で「歴史を飼育する」と指摘している。「歴史から逃れることなくそれを飼育する方法」^{xi}としてその「祭儀」によって過去を消化することができる。彼の「祭儀」についての「諸問題は根源的暴力に対する文化科学のこのような無理解は供犠の危機の中心にある」^{xii}という黙示的な見方は、祭りの深層を浮かび上がらせる。「祭り」は「見え隠れする」ものを現わす場所である。「祭りの場」の空間が林文学の中核に据えられている。「戦争は終わっていない」祭りの空間しか残っていない。この「終わりのないプロセス」にむけられたところに林文学の根柢がある。「昭和二〇年八月九日が現在でしかない。私も、そこから一步も踏み出してはいない」林京子にとって〈八月九日〉にこだわるのもそこに理由がある。

過去を向いているということはそれは過去の問題ではなく、将来の問題であるからと強調している。ハンナ・アーレントが『精神の生活』^{xiii}で「カフカの時間のたとえ話」について指摘しているように、「過去と未来の間の溝が口を開けているのは反省においてのことだけである。反省の主題となるのは不在のものであり、すでに消え去ってしまったものかまだ現れていないものでだけである。反省によって不在の『領域』が精神の前に現れる」のである。

林京子は一人の被爆者としての目から、見返すような視点で原爆の沈黙を打ち破ろうとしている。彼女の発声によって、長崎の原爆の沈黙を逆に確証したのである。当時の惨状を忘れることができず悪夢にうなされ、被爆者の心の底には、重い沈黙がある。林京子が沈黙を打ち破らない限り、人々の日常に埋没してしまうもの、私たちはそれが沈黙であることさえも意識できずにいるものを意識しえたのである。これまでの考え方の習慣性によって軽視され、それが沈黙だとさえ感じていない時、この沈黙の実存を探求することはとても重要なことである。林京子を書くことでかえって人々に沈黙の存在と忘却されていくことへの怒りを意識させてくれる力になる。

原爆被害者の日常生活を、それ自体非日常生活の「祭り」というメタフォアで表すことは、忘却へのアイロニーをおびた抵抗である。日常と非日常、生と死、沈黙と祭りというアンビヴァレンスであるものが呈示されている。これは李静和による「記憶から生まれた証言や歴史性やシンボル性を、いかに保ちうるか」の問題提起につながる。李静和は『つばやきの政治思想』で、「忘れたい記憶」「語れない記憶」「歴史化できない記憶」「失われた記憶のすべては目に見えない忘却の比喻」と指摘している。

林がエッセイ「三十三回忌の夏に」（一九七七）で言及したように、核兵器全面禁止であり

ながら核実験は行われ、核兵器開発は、際限のない力への均衡への争いになって続けられている。二つの相容れない矛盾の現実についての批判的な考察がある。この矛盾した両極の現代の中で、「ただ（人類という）生物上の種—目覚ましい歴史をもち、われわれの誰もがその消滅を願うはずのないこの（人類という）種の一員として反省していただきたい」という「ラッセル＝アインシュタインの声明文」（一九五五年七月九日）への林の共感が伝わってくる。林のこの問い直しは、声明文中の「人類の消滅か、戦争の廃棄か」という問題提起に対して、人類が本当に応えることができるかどうかを問い詰めたのである。作者は「人と核」の問題に対する懐疑と詰問を「祭り」の暗喩で具体化したといえよう。

林文学は生きることの無限の渴望や、限りなく死に近い不条理なもののような精神状況を再現し、その再現は追体験のプロセスを迫るのである。林京子の書く行為は、骨に達する痛み、見えない暗黒のもの、記憶の痕跡を見据えることでもあった。痛み、恐怖、絶望によって孤立している女性の存在感は、書くことに移行することによって、内面の精神世界に向ってより一層重層的なものが浮びあがってくる。林京子の書くことの欲求を認識するだけではなく、七〇年以上前の被爆問題が今もなお終わっていないということであり、再び林文学を捉え直すことは、「有意味空間」^{xiv}を持ってきているのである。ユング「創作は、時間的に異なる歴史時間をつなげた歴史に対する叙述と歴史の再構築である」と指摘している。

林文学は単なる個人体験の記録で終わらせない。人類の文明の課題と深くかかわっている文化的なトラウマの継承問題をさらに探究する表象といえよう。なお、存在意識と人間の尊厳を回復する「祭り」の文化が受け継がれていることは今後の継続課題として取り組みたい。また、今日の世界の核問題に直接つながる「原発」について林京子は『収穫』という短編小説で表象化している。この問題については、また稿をあらためて論じることにしたい。

【注】

- i 公益財団法人日本交通公社編著『観光地経営の視点と実践』（丸善出版株式会社、二〇一三年、六頁）
- ii 水田宗子著『モダニズムと〈戦後女性詩〉の展開』（思潮社、二〇一一年、一四頁）
- iii 阿比留勝利『観光地域づくりオーラルヒストリー 第九回』（公益財団法人日本交通公社、二〇一六年、二八頁）
- iv 林京子 川村湊対談「二〇世紀から二十一世紀へ—原爆・ポストコロニアル文学を視点として」（『社会文学』、二〇〇一年六月）
- v C・G. ユング [ほか] 著『人間と象徴 無意識の世界』（河合隼雄監訳、河出書房新社、一九七五年）
- vi 李静和著『つぶやきの政治思想—求められるまなごし・かなしみへの、そして秘められたものへの』（青土社、一九九八年、ページ数の記載がない）
- vii 水田宗子著『大庭みな子 記憶の文学』（平凡社、二〇一三年、一六二頁）
- viii アルフレッド・シモン著『記号と夢想 演劇と祝祭についての考察』（佐藤実枝 [ほか]訳、法政大学

出版局、一九九〇年、一七六頁)

ix (同掲書、三〇六頁)

x C・G. ユング [ほか] 著『人間と象徴 無意識の世界』(河合隼雄監訳、河出書房新社、一九七五年、一一一頁)

xi (同掲書、一七七頁)

xii (同掲書、二三一頁)

xiii ハンナ・アーレント著『精神の生活〈上 第一部 思考〉』(佐藤和夫訳、岩波書店、一九九四年、二三七頁)

xiv 中村雄二郎著『術語集』(岩波新書、二〇一〇年、四二頁)